第9号
2026（令和8）年3月

じんけん うわじま人権だより

人権作品集「いのち」　【標語部門】最優秀作品

君の色ぼくの色　たくさん合わせて　虹にする

宇和島市立御槙小学校　5年　渡邊　司冴

社会を構成するのは多様な人々であることは言うまでもありません。一人ひとりの顔が違うように性格も特性も違ってあたりまえです。その違いを受け入れてお互いの良さを理解し合うことができる社会こそ誰にとっても住みよい社会と言えるでしょう。

子どもにとって初めて経験する「学校」という社会の中で、子どもの頃から、お互いの人権を認め合うという意識が育っていることに感動を覚えます。認め合うだけでなく、違う色がたくさん集まるからこそできる虹の素晴らしさや美しさも知っているのです。子どもたちの人権意識の高さに次世代への希望が膨らみます。

私たち大人は、ついつい違いを理由に線を引いたり、偏見を持ったりしていないでしょうか。多様性を尊重するという基本的な意識の大切さを子どもたちに教えられる気がします。

(宇和島市では昨年４月からパートナーシップ・ファミリーシップ制度を導入しました。誰もが自分自身を大切にして、自分らしく生き、互いを認め合える社会の実現を目指しています。)

人権週間（12月４日～10日）の間、多様性を象徴する色であり、性別、年齢、国籍、障がいの有無、性的指向、性自認など、人々の多様な個性や能力を尊重する重要性を示す、レインボーカラーをイメージしたライトアップを、宇和島城天守で実施しました。

各地域での人権啓発イベント

9/10【宇和島市人権を考える市民の集い】天神小学校

シンガーソングライター monさんの「うまれてきてくれてありがとうトーク＆コンサート」では、会場が一体となって楽しむことができた。ありのままの自分を受け入れて認めてくれる存在があることの大切さを改めて実感した。

11/18【吉田町人権をまもる集い】吉田公民館

ドリアン助川さんに「私たちはなぜ生まれてきたのか？小説『あん』でハンセン病回復者の人生を描いた意味」の講演をしていただいた。他にも幼稚園児の斉唱、婦人会の手話コーラス、小中学生の長島愛生園での学習報告もあり、ハンセン病に関して学ぶ良い機会となった。

11/26【笑顔の集いinつしま】津島中学校

元熊本市食肉センター解体作業員の坂本義喜さんに「いのちと仕事～いのちをいただく～」の講演をしていただいた。私たち人間は動物の命をいただき、生かされているということを再認識するとともに、差別と闘ってきた坂本さんの生き方から人権について学ぶことができた。

12/5【三間町人権あったかコンサート】コスモスホール三間

うたびと/シンガーソングライターの染谷敦子さんに「あなたは、あなたでだいじょうぶ」と題し、人権講演＆コンサートをしていただいた。二名小学校や生徒実行委員による人権学習発表もあり、いろいろな世代が温かい時間を共にした。

編集後記

皆さんは、絵本作家・イラストレーターのヨシタケシンスケさんをご存じでしょうか。ヨシタケさんが書いた本は面白おかしく書かれており、マイナスな言葉が書かれているかと思えば、「じゃあこんな風に考えればプラスになるんじゃない？」と思える言葉が続きます。代表的な『りんごかもしれない』という本では、ある日ひとつのりんごが不思議なものに見えてきて、「もしかしたら反対側はみかんなのかも？」「宇宙から落ちてきた星なのかも？」「心があるのかも？」と、いろいろな「かもしれない」を想像していきます。この物語のように「もしかしたら○○○かもしれない」という思いでいろんな可能性を考えることができれば、苦しんでいるかもしれない人たちに少しでも寄り添うことができるかもしれないですね。もしかすると、これを読んでくれたあなたは、私の大切な人かもしれない…！？

uwajima
ココロまじわうトコロ

編集／発行　宇和島市教育委員会人権啓発課
電話　0895-49-7034
E-mail　jinken@city.uwajima.lg.jp

第20回宇和島市人権・同和教育研究大会

テーマ「差別をなくすために、まず私たちが行動しよう」

全体会　講演　「部落問題の現在(いま)を考える」

－部落問題を教育・啓発でどう語り、伝えるのか－

講師：石元　清英さん（関西大学名誉教授）

大学において多くの学生と部落問題学習を重ねてきた石元氏の講演では、学生の意識調査から知り得た同和問題学習の課題が語られました。明治時代に解放令が出て、155年が経つのに、同和問題学習をしているはずの若者ですら部落問題や部落そのものを正しく理解できていないのはなぜかを説かれました。

1　大学生がもつ部落に対するマイナスイメージや誤解

○　義務教育や高校教育で部落問題を学習しているはずの大学生にも部落に対して暗い・貧しい・閉鎖的といったマイナスイメージをもっている者が多くいる。

○　学校教育で明治以降の部落について語られないので、部落は現在でも江戸時代の身分・職業・居住地が三位一体であると誤解している。

⇒被差別部落出身者に対する差別の事例を学習するだけでは、十分な学習にはならない。部落差別がいかに根拠のないものかというしっかりとした学習が必要。

2　部落とは何か

○　部落の定義は非常に曖昧である。「社会通念によって長い間いわゆる部落と見なされてきたところ、現にそう見なされているところが部落」としか言えない。

⇒無知や無理解、偏見が部落差別をつくりあげている。

3　まとめ

○　なぜ人権を学ぶのか

⇒差別する側に立たないため。

差別に加担しないため。

差別を傍観しないため。

誤解や偏見を批判できる力を付けるため。

新しい人との出会いで生き方を豊かにするため。

部落問題について、一部の大学生と同じ誤解をしている人はいないでしょうか。部落史について正しく学習すれば、それ自体の根拠のなさや、差別の不当性を理解することができるはずです。それなのに、不合理な差別や偏見によって、幸せに生きる権利を奪われている人々が未だに存在します。それを許してきた社会から差別をなくしていくことが今を生きる私たちに課されています。これまでの人権学習を見つめ直し、これからの人権学習の在り方を考えさせられる講演でした。

分科会報告

第１分科会　人権確立をめざす教育の創造A

「共に生きる力を育てる～みんな大切な仲間～」

社会福祉法人宇和島済美婦人会
丸穂保育園　藤川　由佳

・差異（ちがい）のある園児について

子どもたちは一人ひとり、様々な個性をもった存在である。差異（ちがい）のある友達に出会い交流し、共に生きる喜びを体験する。このことによって友達は大変な思いを乗り越え、楽しく生きているんだとリスペクトしながら、共に生きる喜びにつながっていくのではないだろうか。保育園生活の中で、様々な体験を通して得られた、充実感や達成感、物事に取り組む意欲は、子どもたちにとっても、大きな力となり自己肯定感にもつながることだと信じている。

第２分科会　人権確立をめざす教育の創造Ｂ

「思いやりと感謝の心を育む～周囲と関わり、相手の気持ちを想像する活動を通して～」

宇和島市立北灘小学校　渡部　真史

・日々の人権・同和教育に少しの工夫を加えながら

北灘小学校の人権に対する思いを地域全体に広げていくため、公民館と連携して設置した人権標語投函ポスト、児童が主体となった人権集会の開催、積極的な道徳科研修（特に複式学級における同和問題学習）等、例年実施していた活動に、少しの工夫を加えながら、全職員が横並びで取り組んだ。

また、保小連携、お年寄りとの交流、ふるさと学習の充実を図ることは、他者を思いやり、感謝の気持ちを育むことに確実につながった。今後も様々なアプローチから人権・同和教育の充実を図りたい。

第３分科会　人権確立をめざす教育の創造C

「～本校における人権・同和教育の取組～」

愛媛県立吉田高等学校　挟間　宗仁

・授業を通して、人権尊重の意識を育成する

体験学習や実習等の授業が多いため、教職員、生徒、地域の人たちとの交流を深く持つことができ、お互いに教え合ったり、支え合ったりするなど、相手の気持ちを思いやりながら問題解決に臨む機会が多い。自分の価値を実感できる自尊感情の育成も教育目標としている。少人数のクラスが多いため、生徒一人ひとりに行き届いた指導ができるという利点を生かし、面談等を通して指導を行い、また様々な人権・同和教育活動等を通して、自尊感情や他者理解の育成も行っている。

年々多様な生徒が増え、人権に対する意識も様々である。生徒への指導には、教職員の人権に対する意識を一層高める必要がある。

第４分科会　人権確立をめざすまちづくり

「関わりをもつこと」

みみの会　稲葉　哲也

・関わりをもつこと

「目が不自由・耳が不自由・車椅子ユーザーのどれが一番辛いと思いますか」各グループへのその問いかけから始まった。圧倒的に「目が辛いと思う」という答えに、稲葉さんは「耳が聞こえないことの怖さ」を語った。その理由は「コミュニケーションがとれないこと」だと。また、高齢者、妊婦さん、外国人、杖を持っている人などいろいろな人の中で、エレベーターに乗る順番を考えるワークでは、見た目だけでは判断できないことを知ることができた。何が一番大切か。それは相手を知ること。つまり関わること。社会の中のあらゆる人権課題は、知ること、つながること、関わることで解決への道筋は開けると確信した。